



【表紙の人】

春日部工業高校3年、機械科「電車班」の紅一点、板倉心愛(いたくらここあ)さん。自分たちが製作したミニ新幹線とのツーショットで、素敵な笑顔を見せてくれました。

夢と誇りを抱いて 心に届く ものをつくる!

CONTENTS

- 巻頭エッセイ.....02
- 1 “技を磨き心を育む”——高校生ってすごい!.....04
- 2 世界に一着しかないニット。.....08
- 3 かすかべ特産品の魅力再発見!.....10
桐たんす／桐箱
押絵羽子板／麦わら帽子・麦わら製品
- 4 かすかべ「ものづくり」トリビア!.....14

みんなで

シティセールスシンボルマークを使おう!



プラスワン「+1」とはこのまちに住む一人ひとりが大切に想う「春日部の好きなおとこ(魅力)」のこと。マークを使ってみんなで魅力を共有しよう。詳しくは市公式HPへ。



この情報誌には、写真が動くAR動画を掲載しています。

シティセールスシンボルマークのアイコンのある写真でAR(アーアール)動画を楽しめます。スマートフォンやカメラ付きタブレットでAR動画を再生するには、無料アプリ「Aurasma」(オーラズマ)をインストールしてください。詳しくは市公式HPへ。

ものづくりには
その人にしか分からない
“ゾーン”があるのかな



巻頭エッセイ

かたぎり じん

片桐 仁

(春日部高校出身・芸人・俳優・粘土作家)

小中学生の頃から絵が得意で、「将来はゴッホみたいな絵描きになる!」と意気込んでいました。高校は進学校の春日部高校へ。入学早々、勉強についていけず、「これは美大に行くしかない」と思い、3年間ひたすら油絵を描いていましたね。高校美術展で賞をもらったこともあります。その絵は、春日部高校の古い本館校舎から遠く、校門をのぞむ構図で、今思えば、この場所から外の広い世界に飛び出した心境を表していたのかもしれない。多摩美術大学に入ったら入ったで、とんでもなく才能がある人間がいて挫折感を味わいました。でも、授業で粘土作品を作ったら楽しくて、周りからの評価も高かった。粘土が打ちひしがれていた僕を救ってくれたんです。

芸人の仕事をはじめから、雑誌で創作の企画があった時、携帯電話やゲーム機を粘土で盛って不条理なケースにしたら面白いんじゃないかとひらめきました。使いづらくなってもあえて日常的に使うことでアート・パフォーマンスになる、と。これはすごい発明だ、誰かにマネされちゃうぞ、と心配したんですけど、あまりにも作るのが大変だと思われるのか、いまだに誰もマネしないですね。

粘土の作品を掲載する雑誌の連載も今年で18年目。作るのに時間はかかるんですけど、俳優業の合間のいい息抜きになっている気がします。俳優は、

監督や演出家がオッケーを出してはじめて完成する仕事。粘土での創作は、きわめて個人的な、誰のためでもない時間です。そこでバランスをとっているのかもしれない。没頭しすぎて、気づくと5時間経っていた、なんていうことも。いわゆる「ゾーン」に入る瞬間というか、脳内から何らかの快樂物質が出ているんじゃないでしょうか。きっと、ものづくりを仕事にしている職人さんも、その人にしかわからないゾーンがあるんじゃないかな。

今は12歳と5歳の子とも一緒に粘土でものづくりをするの面白いコミュニケーションになっていきます。僕は美術の基礎や技術があるので、どうしてもうまく見せようとしてしまうんですが、子どもは衝動だけで作る。その純粹なエネルギーには刺激を受けますね。誰も子どもは、何かを作るのに熱中したはずですけど、仕事や結婚で忙しくなるとやめてしまう人が大半です。僕の作品を見て、「久しぶりに何か作ってみようかな」と思ってもえたらうれしい。上手に作ろうとする必要はないんです。嫌なことを忘れて、無心に作っている時間にこそ意味があるんですから。



+1のあるまち kasukabe

1973年、埼玉県南埼玉郡宮代町出身。多摩美術大学在学中に小林賢太郎と共にユニット「ラーメンズ」を結成。以後、俳優、ラジオパーソナリティ、粘土創作などさまざまな分野で活動中。写真の作品は片桐さんの粘土作品。タイの形をしたiPhoneケース「鯛Phone5」やメガネケースをベースにした「メガネゴン」など、いずれも既存の製品を粘土で盛ってオリジナルアートにしている。